

## 優秀賞論文要旨

# 父親に対する娘の嫌悪感についての研究

岩 崎 か お り

青年期の親子関係の特徴の一つに、子どもから親への反発や反抗的態度があげられる。子どもが女の子の場合には、男の子ほど反抗的態度は示さないものの、父親との接触を拒否したり、父親に対して不快感をあらわにするなどの傾向があるという。本研究では、この娘から父親に向けられる嫌悪感を取りあげ、そこにどのような要因がかかわっているのかを、女子高校生307名を対象に質問紙調査により検討した。

『父親への嫌悪感』については、過去の文献などを参考に「父が入ったお風呂の湯に入るのは嫌だ」「父はだらしないと思う」などの28項目を作成した。この嫌悪感にかかわる要因として、『両親の夫婦関係』『娘と父親の日常接触』を取りあげた。これらを測定するために、『両親の夫婦関係』では「父と母は仲がよいと思う」「母は結婚記念日や父の誕生日を覚えている」など13項目、『娘と父親の日常接触』では「その日の私の行動について父と話をする」「父と朝の挨拶をする」「父と一緒にテレビを見る」などの10項目を作成した。以上のような項目に対してどのくらい当てはまるかを尋ねた（得点は1～4点）。

得られた回答について、まず使用した項目を因子分析により分類し、まとめた。『父親への嫌悪感』は「父親に対する不潔感（307名の平均値  $M=2.31$ ）」「父親との接触拒否（ $M=2.07$ ）」の2側面、『両親の夫婦関係』は「両親の仲良さ（ $M=2.71$ ）」「両親の記念日記憶（ $M=3.03$ ）」の2側面、『娘と父親の日常接触』は「父親との会話頻度（ $M=1.72$ ）」「父親との挨拶頻度（ $M=2.85$ ）」「父親との同一空間行動頻度（ $M=3.04$ ）」の3側面に分けた。それぞれの側面についての307名の平均値から推測できるのは、対象となった女子高校生は父

親に対して中程度の嫌悪感をもち、両親をある程度仲が良いと思っており、父親と同じ空間で行動し、挨拶もまあまあするものの、会話は少ないということである。

次に、因子分析の結果から得られた側面を用いて、『父親への嫌悪感』が、『両親の夫婦関係』と『娘と父親の日常接触』によってどのように規定されているかをパス解析によって検討した。その結果、『父親への嫌悪感』のうち、「父親に対する不潔感」「父親との接触拒否」の両側面は、『両親の夫婦関係』の中の「両親の仲良さ」、『父親との日常接触』の中の「父親との会話頻度」「父親との挨拶頻度」によって影響を受けていることが示された。つまり、両親のことを仲が良いとは認めていない者・父親と会話をしない者・父親と挨拶をしない者ほど、父親のことを不潔だと思い、また、父親と接触したくないと思っていることが推測できる。また、「両親の記念日記憶」は、「父親に対する不潔感」のみと関連しており、母親と父親がお互いの誕生日を記憶しているというのは、娘の父親に対する嫌悪感とそれほど強く関係しないことがうかがえた。「父親との同一空間行動」については、『父親への嫌悪感』の両側面との関係が見い出されなかった。このことは、父親と一緒にテレビを見たり夕食を食べたりなど同じ空間で行動することが、娘が父親に対してもっている嫌悪感に影響しないことを意味している。また、父親に嫌悪感を抱いていても、父親と同じ空間内で行動せざるを得ないのであるということも推測できる。

以上のことから、本研究の調査対象者となった女子高校生は、全体として、父親に対して中程度の嫌悪感をもち、それは両親の仲の良さや父親との会話や挨拶の頻度によって影響を受けていることが示されたと言えよう。また、両親の仲の良さに関連して、母親が父親のことをどのように思っているのかが、娘の父親に対する嫌悪感に影響するのではないかと推測できる。そして、思春期の女性が父親に抱く生理的感覚を考える場合、娘自身の性的な意識や成熟度、つまづき、問題点、両親が娘を女性としてどう考えていこうとしているか等、これらの点からの検討も必要だと考えられる。